

六丁氏報

●丹青俱樂部。所在京都商業學校○會員飯野芳太郎、鈴鹿榮、前川英三郎、南淳三、中西二郎、井山政造、川瀬光一郎、磯貝眞之助、吉川松五郎、桂平三郎、長谷川貞造、北村定次郎○創立本年三月○月一、二回寫生會を開く○會員の作はアルバムに挿み保存す○アルバムは會員順次に回覽す○毎月一回會誌を發行す(北村定次郎氏報)

豫告

■諸君の御希望により、十一月頃本會から主任大下藤次筆の畫帖を出します。其繪に多大の注意を拂ひしは勿論、製版印刷共すべて價を拂はずやらしてありますから、多少満足なものが出来ること自信して居ります。

雜聞

▲八月の繪葉書競技會は暑中休みて在京の會員少なく、僅に大田南岳、山田全二、小林華秋の三氏に青梅よりは津雲氏、きぬた會の松田氏が見えられた。

▲出品の繪には、随分面白いのが澤山あつた。意匠の部には、跡を後と同一視したのが多く、これ等は選外としたが、中には惜しいのが澤山あつた。

▲意匠といふても、たゞ思ひつき許りでは困る。異なつた思つきなら何でもよいといふ譯ではない。其意匠は高尚でなくてはいいけぬ。美化されてゐなくてはいいけぬ。位置や配合にも注意されたい。此度の課題の中にも、跡といふのに、酒の跡で徳利の倒れてゐるのや、背中に大きな炎の跡などあつたが、是等は餘程うまくかゝぬと物にならぬ。

▲兼て噂のあつた平且といふ雜誌が出た。菊地容齋論は大に見るべきものだ。暗中語は穿つてゐる。併しかゝる記事は所謂樂屋落ちて、一般讀者には何の事だかわかるまい。

▲挿繪は皆面白いが、是も一般の人に其妙味を知らせるとは難いてあらうと危まれる。鹿子木氏の裏繪は思切つてやつたものではあるが、かゝるとが、美術の進歩上益あるべしと思へぬから、他の方向の諷刺を願いたいものである。

▲日本葉書會の展覽會は、盛會のうちに閉ぢた。出品の数の多いので、只ボーとする許り。はがきのやうな細かいものは、矢張りアルバムに挿んでお座敷で見るものであると思つた。

▲泰錦堂からは印刷順序を示すべく本誌の口給の一から三迄を出品した。これを見た人は、製版印刷の苦心を察せらるゝてあらう。

▲松聲堂から、本會エヘガキの第二輯を發賣した。第三輯も不日發賣するであらう。第三輯は、本會同人の丸山晚霞氏の筆で、淺間山下の四季の風物を描いたものだ。氏の筆で版になつたものは少ないから、隨に珍とすべきものである。

▲本會の鶴澤四丁氏は、豫て米國グアンダイク氏の繪畫鑑賞法といふ書を翻譯中であつたが、此程脱稿、世に公にせらるゝといふ。▲繪畫の趣味普及に熱心なる木田寛栗氏は、曾て大日本繪畫會を起し、日本繪の講習録を世に頒たれてゐたが、今度更に洋畫講習録を出さるゝとの事だ。常に繪を見るの機會に乏しき地方人士は、これによりて益する事多からう。

▲神田駿河臺南北屋より近きに發賣さるべき花のふはがきは、なでしこ、よめな、山茶花の三種にして大下藤次郎の筆になり明晰なる解剖圖を添へ其天然の情體を水彩の景色畫として對照の便に供してあるもので教育用及臨本を兼ねたるものである。

▲次號よりは石井栢亭氏の『われの水繪』と題する有益なる記事、二三號に渉りて連載さるべし。

▲みづゑ再版出來、初號より御注文に應ず。賣捌店に無之時は本會へ直接御注文を希望す。